

フィリピンとの掛け橋

第5号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2003年11月10日



第4代フィリピン中央教区主教就任式

2003年8月17日、マニラの聖ステパノ教会で、デキシー・タクロバオ主教は、第4代のフィリピン中央教区主教に就任した。48歳。九州教区からは、牛島幹夫司祭、東美香子常置委員、江崎芳子フィリピン協働委員、板倉徳也総務部員が出席。このあと、東委員は数日、江崎委員は1週間、牛島司祭は2週間滞在して、フィリピン中央教区との交流を深めた。

多くの出会いと体験を感謝



主に感謝。

デコボコ道の海辺や山間地の集落に行くことができました。貧しさの中で信仰を持ち続けて生活をしている人々に出会い暖かい歓迎を受けました。さりげなくてあたたかなホスピタリティー、決して豊かではない人たちの明るさ、強さを見ました。根深く浸透するクリスチャニティーを感じました。

協働関係を結んでいるフィリピン中央教区には困難な状態が多くあると聞いています。わたしたち、九州教

区が出来ることは数えればたくさんあると思います。まず、代祷で祈ること、余裕があれば献金を・・・そして多くの人たちが行って身近にフィリピンを見て、感じてほしいと思いました。そして学ぶことも多くあると思いました。若い聖職者たち、特筆は原姉の地道な活動、みな主のための働きでした。

「全世界に行って全ての造られたものに福音を宣べつたえなさい」(マルコ16:15)滞在中、この短い言葉が心をよぎりました。今回の滞在ではほんの一部しか伺い知ることが出来ませんでした。私たちが祈られて出向いたこと、また多くの出会いと体験を主に感謝します。(東美香子)

*原姉は、父が元日本軍将校ということから、償いの意味を込めて10年以上フィリピンで働いている女性。

ダグラス司祭の聖アグネス伝道所訪問



8月20日朝、ようやく7時過ぎにサントイネス(聖アグネスのことをスペイン語でこう呼ぶ)に到着。このサントイネスという地域には200軒ほどの家があり4つの教会があるとのこと。また、ここに小学校もある。シルベスター執事はここに月に3回通っている、そしてそのうちの一回は更に徒歩で山道を5キロほど行ったキナブアンまで足を延ばす。ダグラス司祭は、第5日曜日にここに来て聖餐式をする。その他は結婚式や葬式、洗礼など特別な時にここまで来るとのこと。

レオン・キヤドサップ司祭来日

昨年の、ダグラス・ラブテン司祭に続いて、今年は、レオン・キヤドサップ司祭が、10月9日（木）～23日（木）、15日間来日し、各地を訪問。12日（日）は巖原聖ヨハネ教会、19日（日）は、宮崎聖三一教会で主日礼拝の説教をされた。巖原での説教は、昨年来日予定で用意していて、「フィリピンとの掛け橋第3号」で紹介していたものと重複するところが多いので、19日に宮崎で語られた説教を紹介する。



（19日の礼拝後に抹茶を飲むレオン司祭）

私たちの主、救い主キリスト・イエスにあつて皆様にご挨拶申し上げます。この挨拶は、デキシー・タクロバオ主教とフィリピン中央教区の聖職、信徒を代表するものです。皆様のお示しくださったおもてなしに対して、深い感謝を申し上げたいと思います。勿論、先ず、ガブリエル五十嵐主教と、宣教における交わりのためにこの訪問と分かち合いのプログラムを用意してくださった九州教区の聖職、信徒の皆様にご感謝の意を表したいと思います。

先週の日曜日、私は巖原聖ヨハネ教会で「宣教における交わりの必要」についての大まかな考えを分かち合うことができました。あの機会を与えていただいた巖原の方々にも感謝したいと思います。

説教

だれでも偉くなろうと思う者は

僕にならなければならない

主よ、わが力、わが贖い主よ、私の口の言葉、私の心の

思いが、御心にかないますように。父と子と聖霊の御名によって、アーメン。

フィリピンの政治の世界では、政治家たちは約束をする者たちとして知られています。そしてその約束は一旦彼らが権力を持つと、破られてしまう約束だということを意味しています。選挙のためのキャンペーンの期間、政治家たちは普通の人のように服を着て、町の通りに行き、農民や労働者と握手して、彼らのスローガンを叫び、当選したなら「良き公僕」になる、と言います。しかし、一旦権力を握ると、彼らは、選挙遊説の間に行った約束をもはや覚えていません。彼らは約束を忘れっぽいのか、あるいは単に選挙に選ばれるためのゲームを行っているだけなのでしょう。時々、彼らの任期が終わった時、彼らはまだそれにしがみつき、公式に新しく選ばれた人に権威を譲り渡すことを拒否することもあります！とは言うものの、これは私の国だけではなく、世界中どこでもあることです。

私が言いたいと思っているのは、人々の権力や名声への強い欲望と、そのことについて扱っている本日の福音書であるマルコによる福音書10章35節～45節についてです。本日の私たちの福音書は、ゼベダイの子であるヤコブとヨハネが、イエス様に近づき、イエス様が栄光を受けられたとき、ひとりをお右に、ひとりをお左に座らせてほしい、と要求したことから始まります。これより前に、イエス様は弟子たちとエルサレムへの途上であり、そしてエルサレムで彼の上に何が起きるか弟子たちに告げておられることを心に留めておかなければなりません。マルコ10章33節～34節では、「・・・人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」とされています。これらの言葉が、ヤコブとヨハネの兄弟の心に混乱を起こさせて、利己的依頼をさせたのかもしれない。この特別な出来事は、マタイによる福音書20章20節～28節にも見つけることができます。しかしながら、マタイの記事では、要求をしたのは、ヤコブとヨハネの母ということになっています。ヤコブとヨハネは、イエス様がもし“復活”されたなら、王になるだろう、そして王なら、彼には、その右と左に座る、高貴な貴族が必要になるだろうと、考えていたように思えます。彼らは勇敢にも、イエス様が直面する苦難、「わたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受ける」（38節）ことができる、

と言ったのです。「杯」と「洗礼」は、旧約聖書の審判と苦難のシンボルなのです。イエス様は彼らに警告して、確かに苦難はやって来る、しかし、それは必ずしも彼らが神の国においてよい場所とか地位を得られることを意味しない、なぜならすべての人がそれを経験し耐え忍ばなければならないからです。神様ただお一人だけが、誰が神の国において高いところに座ることになるか、ご存知なのです。

この利己的依頼を聞いて、ほかの10人の弟子たちは、ヤコブとヨハネに憤りを感じました。彼らも王国で高い地位を望んでいて、ヤコブやヨハネのようにおおいにそれを求めていたのです。12弟子はみんな地位、偉大さ、名声、そして権力への競争に有利な立場に立とうとしていたことは明らかです。おそらく、この口論の最中、ひとりか、ふたりの弟子は、「私はほかの者たちより偉大だ。」と口に出したかもしれません。この世的な名誉は、輝かしいもので、イエス様の直弟子たちの目は、しばしばそれに幻惑されていたことでしょう。弟子たちの間にこの不愉快さを感じて、イエス様は彼らを一緒に集めて、もう一度彼らに辛抱強く、神の国は、彼らが期待しているようなものとは全く違って、そこでは、本当の偉大さは、つつましい奉仕であることを説明しました。キリストご自身がこの一番よい例であって、彼の弟子たちもそれに似たものとなって続かなければなりません。イエス様は、彼らにローマ人について言及して、異邦人たちは権威について違った視点を持っていること、彼らは自分たちの豪華さや壮大さを支えるものを民からまきあげ、その取上げた財産の世話だけして、彼らは民のためには何も行わない、ということ語りしました。イエス様は、弟子たちの間ではこのようではいけない、と言われました。なぜなら、「・・・あなたがたの中で偉くなりたい者は、すべての人の僕になりなさい。いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

(43節～45節)。キリストは僕のかたちをとり、預言者イザヤが預言した、53章の「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをした」苦難を受ける神の僕として来たということ。また、苦難の僕は、キリストが最後の晩餐の中で、聖餐式の杯の言葉「また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。』」を述べられました。キリストは、仕えることを望

まれ、このようにして、人類の救い主、力ある神の子となったのです。私たちはどうでしょうか。誇りを捨てて、本当に僕になっているでしょうか。あるいは、この世の名誉を切望している、ちょうど弟子たちのようでしょうか。

謙虚さは、偉大な僕の美德です。また、キリストはこの美德の模範となりました。そして彼は私たちの手本になるはずで、謙虚さと対照的なのが、誇りです。この美德が、今日の福音書で弟子たちを巻き込みました。誇りは、神様には私たちに天国の予約席を用意する義務がある、という考えです。権力や手柄の追求です。洗練されたかたちの誇りというのがあります。それは無関心なように見えて、英雄的ですらあります。何か言ったり、行ったりする人にある、使命を遂行する優越感です。そのような人は彼らの原則に対して高潔で、忠実なのです。そして、取るに足りない不完全さが、彼らには耐えられないのです。一見したところでは、彼らはそれを主のために行っているように見えますが、実際は、下心があって、彼らは彼ら自身の満足のためにやっているのであって、どんなに不思議であっても、ひとりよがりではないのです。

このことは、私に短い物語を思い出させます。それはこんなものです。ある傲慢な弁護士が、立派な年取った農夫に質問したことがありました。「あなたは、私のように頭を上にもたげてはどうですか？ 私は神様にも人にも私の頭を下げませんよ。」「旦那！」その農夫は答えた。「あの穀物の原が見えますか？あの頭が空っぽのだけが、直立しています。あのよく実ったものは、低く頭を下げています。」

謙虚さというのは、その人自身の状況や仕事、進歩などに無関心なことを意味するものではありません。責任を持つことができないことと同一視するものではありません。劣等感や決断力のなさ、恐怖などを意味するのでもありません。どちらかといえば、謙虚さは、私たちの深い現実を受け入れる勇気です。私たちは神様によって造られた存在であり、私たちが持っているものは、神様からの贈り物です。私たちは自分自身では何も持っていないくて、私たちの命も、神様に借りているのです。謙虚な男と女は、自分自身のあるがままを感謝します。彼も彼女も自分自身を探求し、成長します。彼も彼女も自分の才能を知ることが拒否しません。しかし、その才能は、受け取ったものとして使います。

誰でも、偉大になりたいと願う者は、僕にならなければなりません！僕は、神様が私たちに期待していることを行ったことについて、報酬を要求しません。よき働きへの報酬は、お金のいらぬ賜物であり、それを要求する権利は私たちにはありません。神様のために、またその国のために働くことが許されるというのは、それ自身が報酬です。そして、最後に、私たちは自分が貧しい神様の僕であり、私たちが神様の子どもとして所有している命は、十分な報酬であるということを認めなければなりません。私たちは自分の内にある誇りを手放さなければなりません。名声や手柄は後回しです。手柄は要求する人からは、逃げます。他の人々を自分たちより高く考えている人には、やってきます。真実の威厳は、常に気づかないもので、名誉は常に、予期しないものです。

キリストにあって、私はこの説教を、ブルーノ・ハグスピーエールの「あなたの召命」という詩を分かち合うことで終わりたいと思います。

主は、私に仕事を用意された。

しかし、私は他にたくさんすることがあった。

私は言った「誰か他の人にさせてください。

でなければ、私の今の仕事が終わるまで待ってください。」

私は、主がどのようなようになったのかはわからない。

おそらく、なんとかやっているのだろう。

しかし、私は、やましい思いがした。

私には、自分が神様に間違ったことをしたことがわかる。

ある日、私は主を必要とした。

すぐに彼が必要だった。

しかし、彼は私に全く答えてくれなかった。

そして、私は彼が言うのが聞こえてきた。

私の心の奥底にしみるように。

「子よ、私にはしなければならぬことが多すぎる。

他の誰かに頼みなさい。

でなければ、私が今の仕事を終えるのを待ちなさい。」

今度こそは、主が私を必要とされた時、

私はもう、言い逃れはしない。

私は、手にしていたことをやめる。

主のよきつとめをするために。

そして、今の仕事を失うかもしれないが。

あるいは、後回しになるかもしれないが。

他のだれにもその仕事はできない。

それは、神様があなたに用意したものだ。

アーメン

(訳 小林史明司祭)

レオン・キャドサップ司祭の日程

10月9日・木 13:25 福岡空港着

10日・金 福岡 → 厳原

11日・土 厳原で交流会、タガログ語の聖餐式

12日・日 厳原で主日礼拝説教 → 長崎

13日・月 長崎 → 福岡

14日・火 福岡で教区歓迎会

15日・水 八幡、直方

16日・木 小倉 → 大分

17日・金 大分 → 延岡

18日・土 延岡 → 宮崎

19日・日 宮崎で主日礼拝説教

20日・月 宮崎 → 福岡 評価会、福岡歓迎会

21日・火 有志懇親会

22日・水 福岡 フリー

23日・木 福岡空港出発 14:25

*牛島司祭がフィリピンから帰国する時、2名の神学生から手紙を預かってきました。

九州教区が支援することになった

ベルナルド神学生からの手紙

親愛なる主教様

私たちの主イエス・キリストの御名によって、平和の挨拶をいたします。

私は、レオナルド・L・オシアスと申します。私たちの学長トーマス・マデラのご好意によって、(彼は授業の学費を払ってくれて)、神学校の学士コースの第1年目にいます。私を悩ます最大のものは、次の学期、続けて学べるかどうか、ということです。私は、退職主教のベンジャミン・ボテンガン師父に、学資の限界について話しました。なぜなら、学長が次の学期、学費を出してくれるかどうか分からないからです。すると、主教は、あなたが私の神学校での学びへの援助を考えてくださっていることを話されました。



主教様、私はいつの日にか、司祭になりたいと願っています。そして、これを続けてゆくことがいかに困難なことであるか、知っています。なぜなら、そのためには、費用の面で、大変な重荷が生じるからです。私たちの両親は、私が小学生の時、離婚し、その時から、彼らから援助は受けていません。ハイスクールの学びを続けたくて、卒業まで働きました。しかし、今、神学校での学問的な要求の中で、研究のために時間がかかり、働く時間はありません。しかし、また、皆様のような寛大な人々がいて、私のような資金的に苦しい神学生のために、特に祝福の役割を担ってくださる方々の存在を、本当にありがたく思っています。

お知らせを心からお待ちしています。大変ありがとうございます。神様が常に皆さんを祝福して下さいますように。

敬具

2003年8月27日

ベルナルド・L・オシアス（聖アンデレ神学校学生）

昨年支援したマリオ神学生から



五十嵐正司主教様

主の恵み

私たちの主の御名によって、平和の挨拶を申し上げます。

主教様の教区からのバルナバ牛島幹夫司祭にお会いできて、大変うれしゅうございました。アンドレス・パラテス司祭は、彼を私に直々に合わせるために、神学校へお連れしてくれました。彼の訪問を大変感謝しています。私の最初の手紙写真を添えましたが、今回、牛島司祭と一緒に図書館の前で何枚か写真を撮りました。牛島司祭が言うには、私の送った写真では私の顔はとても小さくて、それを見るためには、虫眼鏡が必要だったとのこと。そして、それを直々に見せてくれました。彼が来たのを機会に、聖アンデレ神学校での、私の学業に関するちょっとした進展について話します。私たちは今、学期の中間にあります。私たちの中間試験は先週終わって、最後の学びの時が、現在進行中です。私は、皆様の援助で、もう学費について心配しなくていいことになりました。

た。このことを本当に感謝します。私は、普通課目を6科目、登録して学習中です。すなわち、「牧会書簡」、「キリスト教倫理」、「協会法の原理と歴史」、「同僚へのカウンセリングの原理」、「教会経営」、「社会活動とその展開」。また、2つの訓練的科目、「実際の教会の簿記」、「論理学（説教演習）」です。ですから全部で8科目がこの学期の学びです。そして、レオン・チャドサブ司祭の指導の下で、ベンディタ、マガラネス、カビテにおける聖嬰兒ミッションの毎週末のカテキズム（教会問答）クラスの担当をしています。また、主の恵みによって、私は2003年7月16日、聖アンデレ神学校の学生会長に選ばれました。これは、私のような新参者には難しい仕事だということは、わかっています。しかし、これは人々を導く初歩を学ぶための、私に対する挑戦だと信じています。これは、私の、パリッシュでの実践の、先取りだと思っています。また、この学期の終わりの私の成績と進展を報告するつもりです。改めまして、皆さんからの惜しみない援助を感謝いたします。

そちらからの知らせを楽しみに待っています。

良き主が、主教様の働きの上に、祝福と成功を、もたらして下さいますように。

敬具

2003年8月27日

マリオ・B・ツグネイ（聖アンデレ神学校学生）

*九州教区は、ツグネイ神学生の支援については、卒業までもう少しなので、教区内の有志からの献金をそれにあてて、今後、協働献金などによる継続した支援は、1年目のベルナルド神学生を対象にして、彼が卒業するまで援助することになりました。

フィリピン中央教区との協働関係の祈り

慈しみ深い主よ、あなたは天地創造によってあなたの力、あなたの支配、あなたの正義を現わし、御子イエス・キリストによって深い愛を現してください。主を賛美するために選ばれたわたしたちは声を一つに合わせ、あなたに感謝・賛美の祈りをささげ、多くの人々に御恵みを分かち合う働きができるようにお導きください。特に、共に祈り、励まし、キリストの働きを担う器として与えられたフィリピン中央教区との協働関係を祝し、用いて、あなたのみ栄えを現わすことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

交流写真集



8月18日。就任式の翌日、レオン夫妻の家を訪問
(中央がレオン司祭、左が夫人)



8月20日。昨年日本に来た、ダグラス司祭と日本料理
の店で。(彼は日本料理のファンになってしまった。)



10月11日。土曜日の午後、厳原聖ヨハネ教会で行われ
たフィリピン語の聖餐式に集まった人たち。



10月19日。宮崎聖三一教会で礼拝後に行われた茶の
湯のサービス。



10月22日。教区会書記の作業をしている司祭たちと
一緒に福岡のファミリーレストランへ朝食に行ったレ
オン司祭(右)と牛島司祭。

編集後記

今回は、8月17日に行われたタクロバオ主教の教区主
教就任式への出席の人々のことや、10月に日本に来た
レオン司祭のこと、また私たちが支援している二人の神
学生のことなど盛りだくさんになりました。

発行所 九州教区宣教局フィリピン協働委員会
〒810-0045福岡市中央区草香江2-9-22
日本聖公会九州教区事務所内
電話 092-771-2050
E-mail d-kyushu@try-net.or.jp